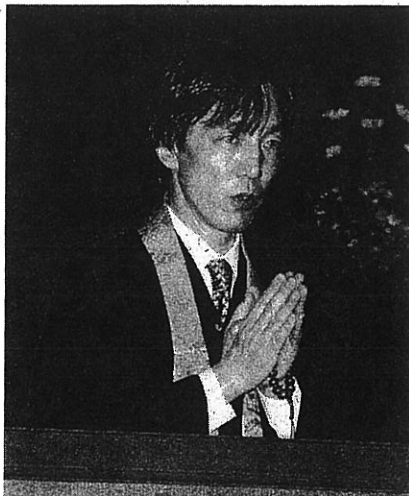


産経新聞 2015年1月16日(金)

(京都)

「世界中からの支援 生きる力に」



追悼法要で法話をを行った鍋島直樹・龍谷大教授

阪神大震災 あす20年

龍谷大で追悼法要

今日17日で阪神大震災から20年となるのを前に、龍谷大は深草キャンパス(京都市伏見区)で15日、追悼法要を実施。自身も神戸市で被災した鍋島直樹・文学

部教授が「悲しみから生まれるもの」をテーマに法話をし、学生ら約150人が耳を傾けた。

龍谷大では当時2年生だった女子学生1人が阪神大震災で死亡。僧侶でもある鍋島教授は神戸市中央区の寺院で被災。鍋島教授は法話で「大地から突き上げるような地震で、動けなかった。寺院の建物は半壊し、どうなるのか怖かった」と述べ、「世界中の人々からの支援を忘れたことはない。一人一人の支援が生きる力になった」と振り返った。

一方、「略奪や暴動がなかったことは救いだ。誰もが命のはかなさと尊厳を感じたからではないか」と指摘。そのうえで、「亡くなった人の愛情を忘れないでいるのは、今ここに生きている自分自身だけしかできない」と述べた。

続いて、震災復興のシンボル曲「しあわせ運べるように」を参加者で合唱し、犠牲者をしのんだ。

また、赤松徹眞学長は、「私たちは苦しみの中で、ともに助け合い支え合うことを通して、未来へと歩み出すことができたのではないか」などと語るメッセージを発表した。